百人一首撰文庫

全

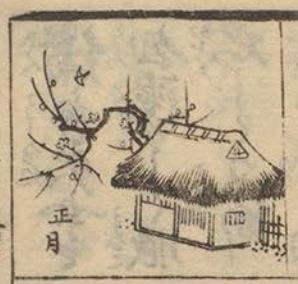
女大学
一文女子大成
長して他人
の家へ行男
指しの仕るあ
なるまこの男子
ものの数
天智天皇
秋の田を
苅穂乃
庵の
苫をあらみ
我衣手は
露にぬれつゝ

持統天皇

柿本人麿

子の父母都
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

山邑赤人
田子の浦
うち出て
見れば
白妙の
富士の高嶺に
雪は降つつ



ゆくなり
一女を密夫
人の膳を
喜びべし

猿丸太夫
奥山に
もみぢ
踏わけ
なく鹿の
こえきく時ぞ
秋は悲しき

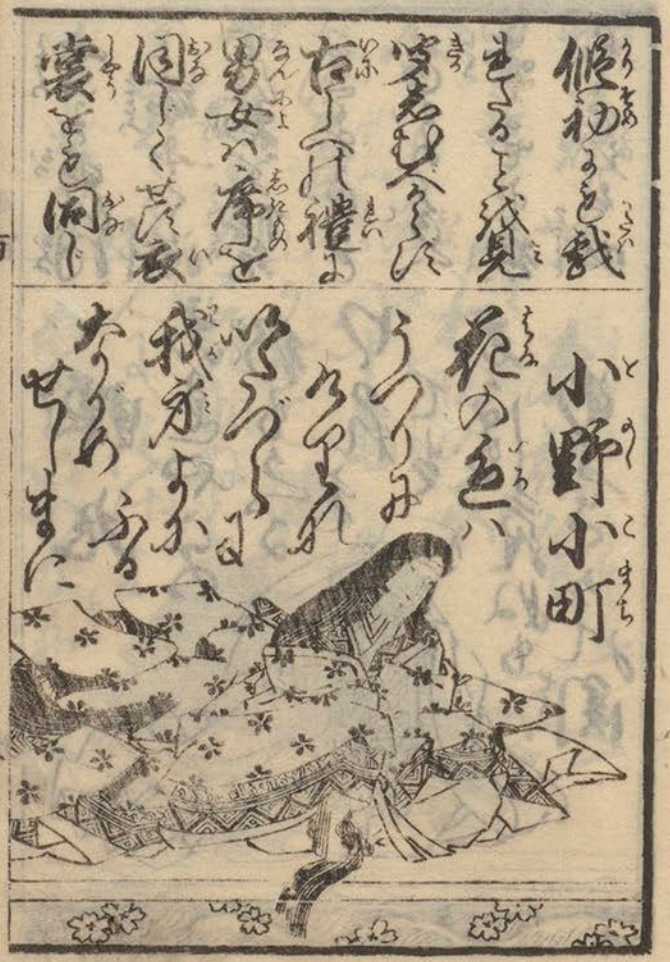
緒方女を
仏様ぐーく眼
恐ーくつ前
て人を恨り云
茅屋の月みとの
ひとりぐらく
ぼさて人ふ

中納言家持
鶯のわくせる
ちぶみ
をくれ乃
ちりきを
られむ
秋ぞ更ふる

先立人と假
嬢と秋月ふ
清ると人を清
笑ふと人を清
す風なる人清
女の乃よ遺
秋ぞり女人雅

安倍仲麿
わ海のちぶ
ありけ
られむ
かすがの
みさきの
いでし月を

玄賓法師


小野小町

蟬丸
あまのやの
ふきもうつる
ひのれを
てを
あらしも
ふせぬも
わかさうれ関

泰議管
和田の原
八十島
かけて
こぎ出ぬと
人には告よ
あまのつりぶね

僧正遍昭
天つ風
雲の
かよひ
吹
とじ
ひ女のとをる
道
をとめ

陽成院

二月

紙屋乃家
在原業平朝臣
千早振
神代も
きゝもせず
天の川
竜田の
からくれなゐ
水くゝるとは

中納言行平
あまとゝ
いふかぞの
山乃
峯に
まつとし
きこゝの
今のこゝ

藤原敦行朝臣
住の江の
岸による
波よるさへや
夢のうちにも
人めよくらん

伊勢
難波がた
みじかき
あしの
ふしの間も
あはでこの
世を
すぐしてよとや

三月
元良親王
素性法師

どこも婦人の
心ゝ
嫁ゝ
姑ゝ
は
同性のみを
喜ゝ

文屋康秀

吹ゝに
秋草
くさ
きの
しをれを
むべ山風を
あらしといふらん

四月

武しい
ふ
ゝ
書
ふ

大江千里

月見
ちぢみ
物ゝ

うれ
我身ひとつの
秋ハあゝ

當家
三條右大臣

貞信公
小倉山
峰のもみぢ
心あらば
今一度の
行幸まつ

中納言兼輔
みかの原
わきて流るる
いづみ川
いつみきとてか
恋しかるらん

九月
源宗平朝臣
山ざとは
冬ぞさびしさ
まさりける
人めも草も
かれぬとおもへば

九河内躬恒
心あてに
をらばやをらん
はつしもの
おきまどはせる
白菊の花

壬生忠岑
坂上是則

春道列樹

六月
紀友則

仕あらそ後
ちかひあるを
中好なる
ものなり
一婦人に別
るゝを悲しむ
夫と主人と

薮東典風

誰とうを
人に
なし
る物乃
松もむしの
友かなるみ

必ず教まひ
情こそ事ふ
面白ゝ
悔るべきを
恨る婦人の
乃を人有
淫かなり

紀貫之

人もいさ
心も
知らぬ
ふるさとは
花ぞむかし
香にほひける

清原深養父
夏の秋を
青まぐ
なら
明ぬると
雲のいづこみ
月やとるらむ

文屋朝康
白露に
風の
吹しく
秋の野を
つらぬきとめぬ
玉ぞちりける

七月
右近
長くるる
分をハ
ふれば
ちうひて
人の命ハ
をくるを
あるる邪

奉獻等
あさぢふの
をの
ふの
ぶ
ぶ
ぶ
ぶ

平通盛
志のぶれど
色に出
ぬ
人のこゝろぞ

壬生忠見
恋すてふ
わが名は
まだき
立ぬ
人しれぬ

八月
清原元輔
契こされ
ちぎり
きて
神代
もすえの松山
なみこさじとは

中納言敦忠
あひ見ての
後の
心に
くらべば
むかし
は
なほ
なかりけり

中納言朝忠

穂徳公

曽祖父好意

哀愛法師
八重蔦

九月

て都の内乃
ふんとう
織縫績紡

十月

蔵東道化物語

ゆめまぼろし
くるく
物くさ
ものうり
かぐら
ものうらない
ものしり

右大将道綱母

歌きたく
むすり
ゆるよの
わるまい
いふ人
しる人
物とこのわ
しまい

鳥ゑぼうし
又茶酒のど
多く飲ぐも
舞扇小ぶ
浄瑠璃かぶし
濃うる事を
又祇べうぶし

儀同三司
大納言公任

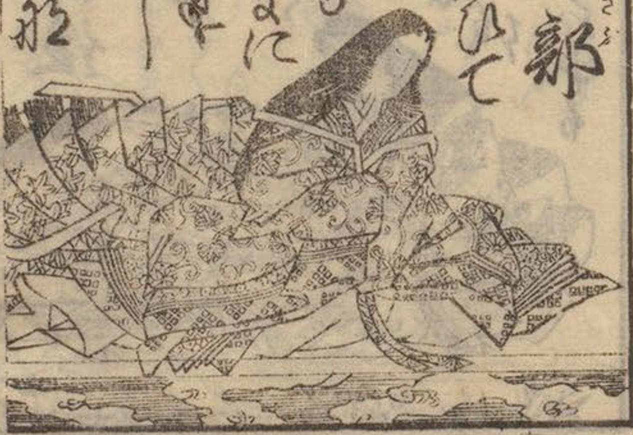
十月

神仏をまもり
なるべし
一人の妻と

和泉式部
あらざらむ
この世の
ほかの
おもひ出に
今一たびの
あふこともがな

家はその家を
続べし
妻の心ひ悪し
く放埒なれ
ば家を破る
万事倹約
を専とせよ

紫式部
めぐりあひて
みしや
それとも
わかぬまに
雲がくれにし
夜半の
月かな



小式部内侍
大江山
いくのゝ
道の
遠ければ
まだふみも
見ず
あまの
はしだて

伊勢大輔
いにしへの
奈良の
八重桜
けふ九重
にほひ
ぬるかな

十二月

陰中陽
三十二

相撲

六玉川之圖
井山
玉川

能因法師

食を絶へ文
字を仕る衣を
乗る席を
掃き清め
汚れを拭ひ
考へ家の門
戸を閉ざす

良暹法師

ひぐらしの
鳴く
出て
眺めれば
いつこもかわる
秋のゆふぐれ

外へいづる
ひぐらし
一声なくなり

大納言經信

夕さまべ
門田の
稲葉
そよぐ
あしのまろや
秋風ぞふく

源俊頼朝臣
うゝもそるる人を
きの心かな
まけしれたゝ
いのゝぬりの弓

藤原基俊
契をき
さわ
のゝ
つゆと
命
あやまれりとも
秋をいぬるか

清水
玉川

源義国
渋谷庄司
かよふ
ちどり
の
なく
ゑ
義家朝臣
ひきまゝ
ゆみ

左京大夫敦頼
秋風に
なびく
雲の
ま
より
いでる月の
かたちかな

玉川
水

後德大寺左大臣

道円法師
世の中よ
なにわ
山のあなる
麻ぞなくかる

千島王川
菊亭清輔朝臣
俊夏法師

高野
玉川
西行法師
なげとてか月やは
ものを
かこちがほなる
恋のなさけか
四十三
蓮法師
ひとさとの
雪も
まこと
ひぬ
槙の葉の
雪ふるのみ
秋の夕ぐれ

二條院讃岐
我袖は
しほひに
見えぬ
沖の石の
人こそしらぬ
かわくまもなし

猫金右衛門
世中を
うのもの
流こぐ
猫の
小舟の
はるかぜ

春風雅經
みよしの
心の
林風
さそふ
かけて
ゆるさて
寒く
夜うち
なり

蒙古襲来図
おもひなく
うきよの
民ゝ
ねぶる
ふるの
月
松み
墨ぞめ
袖

連をひて家の
門徒をべし
右條々雖為
ようの儀かべし又
言葉をもって
表白をもって
しかるべき人

入道前太政大臣

むさしの
あぶみの
庭乃
雪かも
ありけるを
我身なりけり

如斯の長按
乃ちなる多
くをへく婚
姻せしむれ
ばこれ家
どうくもの
とし一生涯と

摂中納言定家

おぬ人と
まのかれ
うらの
海人の
なれる
袖くや
ぬれぬの
身もこがれけり

住吉景

いへの宝なる
この女子の
親たる人この
理を知らずん
ばあるべからず
女大学絵

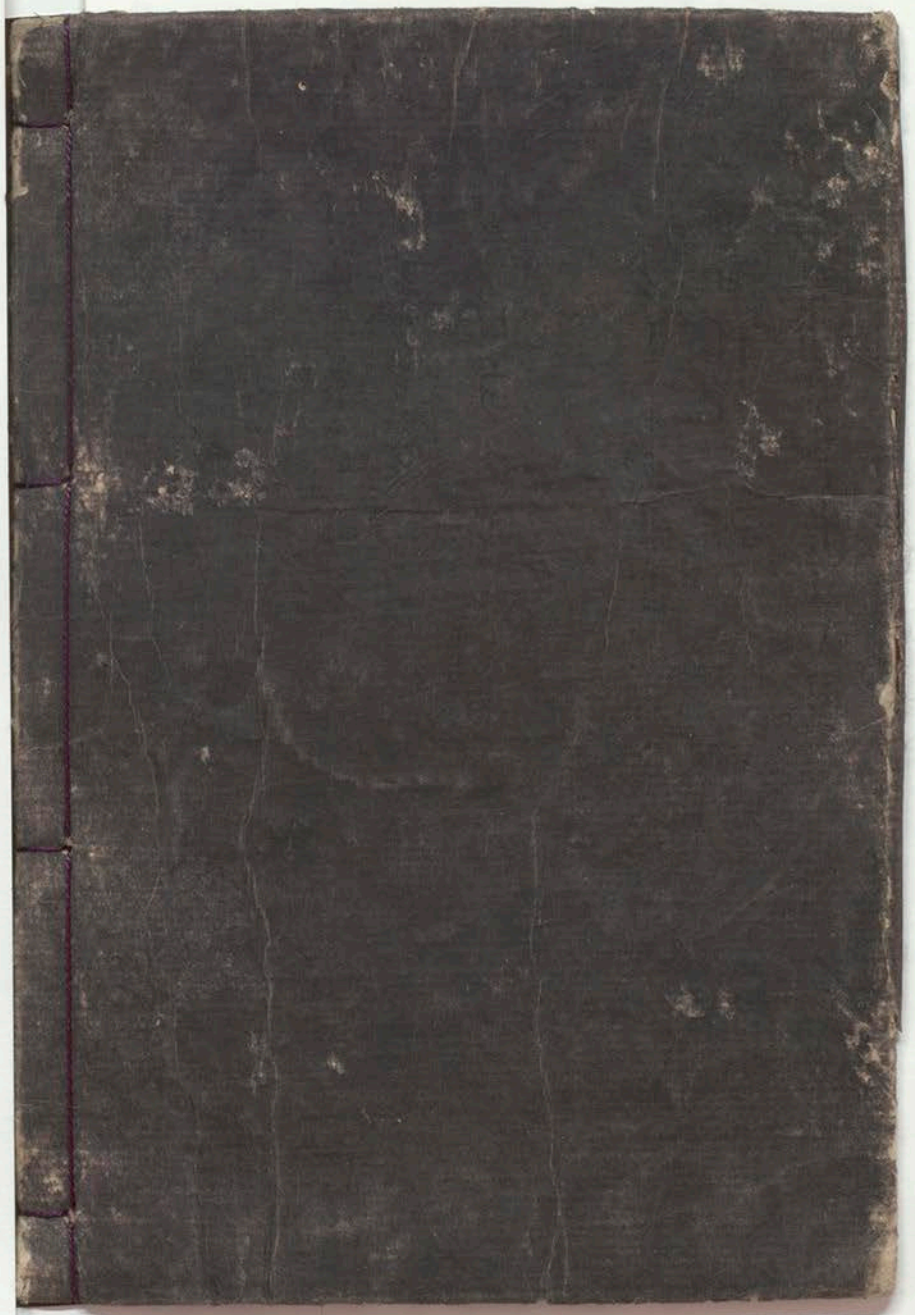
順徳院

百敷や
ふるき
軒端の
しのぶにも
なほあまりある
むかしなりけり

女中無双封じやう

消息縦文まへ文ともに二枚にかくべし 文ハ一枚なるハ[illegible]竪文ハ[illegible]
一枚を二ツにおりて[illegible]札紙あるべからず[illegible]
[illegible]

[illegible]
中
下
[illegible]

天保十五辰年
東都書肆
西村源六

44007